Do my best！

国立能登青少年交流の家
令和５年度事業報告書

はじめに～私たちが忘れてはならないこと～

青少年教育施設にとって厳しい冬の時代が続いています。予算も大きく削減される中で老朽化の対応さえも中々進まない状況です。そのような中で施設の「存続」こそが、いま最も重要な課題であると思っています。私事にはなりますが前職である東京都で青年の家の全廃を経験しました。当時の都議会での施廃止の議論の中心は利用率でもなく、経費の話でなく「いま本当に役に立つ施設なのか?」ということがメインテーマでした。勿論、効率化、予算縮減の努力も非常に重要な仕事ではありますが、その中で、地域、青少年にとって「役に立つ施設であり続けること」、このことに真正面から取り組むことが最も重要であり、私たちが決して忘れてはならないことであると思います。

【青少年の課題に対する対応】

このような中で、令和 5 年に衝撃的な数字が提示されました。令和 4 年度における小中の不登校者数が過去最多の約 30 万人、さらに、2022 年の小中高校生の自殺者数が過去最多の 500 人超(令和 4 年 514 人・令和 5 年 513 人)というものです。青少年教育施設である当所として、この数字に真摯に向き合い、私たちのできることを積み重ねていくことが重要であると考えました。そこで本年度、当所において「あいさつ」「チャレンジ」「仲間づくり」の 3 点を大切な KEYWORDS として、研修支援事業、教育事業に取り組んだところです。人と人との「つながり」づくりからの自己有用感の醸成、活動に仲間とチャレンジする中での達成感から、自己効力感(小さな成功体験)を得ることを柱に取り組みました。このことを通じて自己肯定感を高めると同時に、自己決定力(青少年の自立)をつかむこと、まさに私たちの大切な役割である「体験活動を通じた青少年の自立」を具体化したものです。その視点から報告書をお読みいただければ幸いです。

【能登半島地震に対する地域対応】

令和 6 年 1 月 1 日に能登半島地震が発生しました。1 日には地域の方 300 名が避難されました。この日を皮切りに「災害復旧施設」として機能を開放し、1 月 4 日からは一般団体の受入れを停止し、被災された方、復興関係者の受入を HP で広く周知し、受入れをスタートさせました。さらに長期的な断水対応から浴室開放を行い、3 月末までに延べ 1 万人の方が利用されました。さらに体験活動を通じての子供たちへのケアでは「えがおプロジェクト」を立ち上げました。機構本部、全施設の職員の皆様の応援派遣を受けて、リフレッシュキャンプをはじめ多様な事業を展開し、1500 名を超える能登地区の子供たちが参加をしました。今後も多くの方々のご協力を得ながら当所の特性を活かした被災対応に全力で取り組むことで、能登地区の未来づくりに貢献していきたいと思っています。

【多くの方々とともに】

令和 5 年度において、常に震災対応や事業展開においても職員とともに議論し大切にしてきたのは「何のために」「誰のために」 やるのか? そして「どのような手段」が有効であるのか? という「目的と手段」です。このことを軸に合意形成をしていくことを大切にしました。そして、さらに大切なことは「誰とともに」にやるのか? この点です。この「つながりづくり」の中での展開こそが「ナショナルセンター(国立施設)」として不可欠な役割であると思います。このことなしに施設の運営が成り立つことがないと深く学んだ 1 年でした。多くの方々に感謝すると同時に、今後も国立ならではの、さらに能登青少年交流の家ならではの「つながりづくり」をめざして運営していく所存です。 皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

国立能登青少年交流の家 所長 北見 靖直

目　次

やる気！元気！ボランティア！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
NOTO ワールドアクティブ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」「オリエンテーション合宿 in 能登」・・・・・・・・・5
ファミリーキャンプ① ～能登の自然を楽しもう～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
SUMMER ADVENTURE ～仲間とともに明日へのチャレンジ～・・・・・・・・・・・・・・・・9
のともキッズ 2023・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
HAKUI キッズイングリッシュキャンプ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
能登オープンデー ～楽しもう！交流の家で～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
ヒノビィと一緒　通学合宿～仲間と一緒に生活習慣と学習習慣を身に付けよう～・・・・・・・・・・・25
幼小いっしょに！のとまり会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
自然体験活動指導者（NEAL リーダー）養成講習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

※プログラミング教室（R6.2.3-4）、ファミリーキャンプ②（R6.2.17-18）は能登半島地震のため事業中止

国立能登青少年交流の家
マスコットキャラクター
「ヒノビィファミリー」

「やる気！元気！ボランティア！」

1 趣旨

ボランティア活動に必要な知識や技能の向上を図り、ボランティアとしての資質を高め、広く社会でボランティア活動に取り組める青少年を育成する。

2 日程

（1）期 日 令和5年6月 10 日（土）～11 日（日） 1泊2日
（2）参加者 大学生 7名 （男性3名、女性4名）、社会人 1名（女性1名）
（3）研修内容

6月 10 日（土）		6月 11 日（日）	
8:45	受付	6:00	起床・身辺整理
9:00	開講式	7:20	朝食（食堂）
10:00	講義「青少年教育について」	9:00	講義・実習④
11:45	昼食		「ボランティア活動の意義」
13:00	講義・実習①	10:15	講義⑤
	「安全管理（救命救急講習）」		「青少年教育施設の現状と運営」
16:30	講義・実習②	12:00	昼食
	「青少年教育施設におけるボランティア活動」	13:00	能登事業 PR タイム
		14:15	ボランティア制度の説明
20:30	実習③	15:00	閉講式
	「ボランティア活動の技術」	15:30	解散
21:15	交流タイム		
	入浴		
	就寝		

3 成果と課題

（1）活動プログラムの実際

①サポートボランティア2名が事業運営に携わり、アイスブレイクや野外炊飯指導補助を行った。

②ボランティア活動の技術では野外炊飯を行った。ただ野外炊飯をするだけではなく、実際の指導での安全管理を考えながら、ボランティアとして事業に参加したことを想定して、参加者が意見交換をしながら実施した。

（2）アンケート結果について

①教育事業アンケートの満足度（「満足」の評価）は、事業全体において 100%、事業プログラムにおいて 75%、事業運営の 1 項目、職員の指導・助言や対応の 1 項目において 100%であった。

②アンケートの記述には「自分にとって未知の分野の学びが多くあり、学んだことを自分の成長のためにも役立てたい」「子どもの可能性を信じることができる人になりたい」「ボランティアとしての自分の立ち位置を考えることができた」という意見があった。

（3）成果と課題

①成果

・今年度の広報は、県内の国立大学の学生課、羽咋郡市内公立高校に学生サイトへの情報掲載や学生への広報を依頼した。また、「青少年教育」の講師池田氏、「ボランティア活動の意義」の講師中野氏が所属する金沢星稜大学、新潟青陵大学にも広報を依頼した。また、法人ボランティアが所属する学生ボランティア団体にも広報した。

・今後のボランティア活動をしていく上での新たなネットワーク作りの場にすることができた。

・ボランティア登録手続きにおいて、フォームを活用したことで、円滑な登録を行うことができた。

②課題

・開催日程において、ボランティア団体のイベントと重なり、参加者が限られてしまった。開催日程や募集時期を登録ボランティアに確認しながら、設定する必要がある。

・「法人ボランティア」とはなんなのか、どういう内容の活動をするものなのか、事前に知らずに来たので募集案内等に説明があると良かった」との声があった為、趣旨や概要に記載する必要がある。

・参加者が、今後、当施設でのボランティア活動に関わってもらえるよう、引き続き事業案内等の情報発信をし、学んだことを実践できる機会を設けることが必要である。

4 事業の様子

【講義の様子】

【救急救命講習】

【野外炊飯・火付け】

【フレッシュタイム】

【集合写真】

「NOTO ワールドアクティブ」

1　趣旨

・異なる文化をもつ人々との様々な交流体験を通して、様々な国（自国を含む）の文化に対する理解を深める機会とする。

・英語をはじめとする外国語を用いた体験活動を通して音声や基本的な表現に慣れ親しみ、多様な相手とコミュニケーションを図ろうとする素地となる力を養う。

2　日程

（1）期　　日 令和5年6月24日（土）～25日（日） 1泊2日

（2）参 加 者 小学校5･6年生 18 名

（3）協力団体 NPO 法人 YOU-I

（4）研修内容

６月２４日（土）【館内泊】			６月２５日（日）		
13:00	玄関ロビー	集合＊受付開始	6:00	宿舎	起床、清掃
13:30	講堂	オープニング･仲間づくり活動	7:00	講堂	フレッシュタイム
14:30	講堂、館内	**アクティビティ①**	7:30	食堂	朝食
		「食材を探しに世界へ」	9:00	キャンプ場	**アクティビティ③**
17:00	講堂	イブニングタイム			**「野外炊飯で世界を味わう」**
17:30	食堂	夕食			
18:30	研修室	**アクティビティ②**	12:00	キャンプ場	昼食
		「世界で遊ぼう」	13:00	講堂	振り返り、クロージング
20:30	浴室	入浴	13:30		解散
21:00	宿舎	就寝準備			
21:30		就寝			

3　成果と課題

（1）活動プログラムの実際

①アクティビティ①で買った食材を用い③で野外炊飯したり、アクティビティ②で教えてもらった言語を③で多く使うようにしたりしてストーリー性のある活動とした。

②サポートボランティア4名に事業運営に携わってもらい、活動班で参加者の補助やアクティビティの準備や指導補助を行った。

③参加者と国際交流員が1対1でコミュニケーションしなければならない場面を随所に設定した。参加者個人のコミュニケーション能力の差が大きく表れた場面であった。

（2）事業アンケート結果について

①NOTO ワールドアクティブは楽しかったですか。

「とても楽しかった」及び「楽しかった」を合わせた肯定的な回答が100%となっており楽しく活動できたことがうかがえる。

②「5つのルール」、「使ってほしい英語の表現15+5」はできましたか？

「よくできた」及び「できた」を合わせた肯定的な回答が83%となっており、多くの児童が英語を使って活動することができたことがうかがえる。

③キャンプ、プログラムに関する記述

・初めは不安だったけど、やってみたら思ったより楽しくて、また参加したいと思いました。など

④英語でのコミュニケーションに関わる記述

・入国や出国の手続きなどを英語で言えるようになりました。
・英語を話して、外国人と仲良くなれてよかった。
・たくさんの英語を使って会話することができた。など

⑤国際理解に関わる記述

・インドネシア語を覚えるのが楽しかった。これからもたくさんの外国語を話したい。
・アメリカ、インドネシア、オーストラリアのことがたくさん分かった。

4　事業の様子

【オープニング】

【食材を探しに世界へ(出入国審査)】

【食材を探しに世界へ(買い物)】

【世界で遊ぼう(クッブ)】

【野外炊飯で世界を味わう(薪割り)】

【野外炊飯で世界を味わう(かまど)】

【野外炊飯で世界を味わう
(クラムチャウダー・カートンドック)】

【クロージング】

「オリエンテーション合宿 in 能登チャレンジ」

全国高校生体験活動顕彰制度「地域探究プログラム」とは

国立青少年教育振興機構が令和2年度に新設した「全国高校生体験活動顕彰制度『地域探究プログラム』」は、高校生の体験活動を通じた成長を目指し、改訂された学習指導要領のキーワードである「探究」の手法を用いて学習を深める制度である。取組みを段階的に分けており、ステップⅠ「地域探究トライアル」では「探究」の学びと実践を、そしてステップⅡ「地域探究アワード」では意欲の高い高校生向けに実践活動の顕彰を行う。

1 趣旨

高校生が地域づくりや地域の課題解決などに関する体験活動を通して、問題発見・解決能力を身に付け、新たな価値を創造する人材育成に資するとともに、それぞれの実践活動の成果や自身の成長を適切に評価し、青少年の体験活動に関る社会的な認知を高める。

2 日程等

（1）期日　　令和5年7月 15 日（土）～7月 16 日（日） 1泊2日
　　令和5年7月 22 日（土） 日帰り

（2）参加者　　石川県立門前高等学校 第1学年 1名
　　石川県立鶴来高等学校 第3学年 1名
　　石川県立羽咋高等学校 第1学年 1名
　　鵬学園高等学校　　第2学年 1名
　　遊学館高等学校　　第3学年 1名　第2学年 2名

合計 7名

（3）講師及び研修内容

① 講 師

［講話「地域活性に関わる実践」］
日蓮宗妙法寺住職 高野 誠鮮 氏

［フィールドワーク①・②］
羽咋市歴史民俗資料館学芸員 中野 知幸 氏
はくい獅子保存会　　横山 孝信 氏

［ガイダンス、講義・演習①～④、発表①②］
恩田 雅博（国立能登青少年交流の家企画指導専門職）
他（国立能登青少年交流の家職員）

② 研修内容（カリキュラム）

分野	No.	科 目 名	月/日	時 間	探究のプロセス	主な活動内容	活動場所
導入	1	ガイダンス	7/15	10:00-10:30	－	地域探究プログラムの内容・スケジュール等の確認。	交流の家第8研修室
	2	フィールドワーク①－1「地域の魅力発見」	7/15	11:00-14:00	課題発見	フィールドワークを通して、地域づくりに関する取組についての活動を体験し、その魅力を発見する。（神子原米等）	神子原地区
		講話「地域づくりの実践」				「地域づくりの実践」の講話を聴き、今後の活動に向けて意欲を高める。	
	3	フィールドワーク①－2「地域の魅力を発見」	7/15	14:30-16:00	課題発見	フィールドワークを通して、地域づくりに関する取組についての活動を体験し、その魅力を発見する。（獅子舞）	神子原地区
	4	講義・演習①「地域理解」	7/15	16:30-18:00 19:00-19:30	課題発見	情報マップ作りを通して、FW①の調査内容の全体像を把握する。	交流の家第8研修室
探究のプロセスの実践	5	講義・演習②「課題解決の基礎」	7/15	19:30-21:00	課題の設定	FW先の問題点を明らかにし、その解決策や質問を考える。	交流の家第8研修室
	6	フィールドワーク②「地域課題の探究」	7/16	9:00-11:50	情報の収集	講師との意見交換や別の取組の調査を通して、より有効な解決策を考える。	羽咋市歴史民俗資料館
	7	講義・演習③「地域課題の探究」	7/16	13:00-16:00	整理・分析、まとめ	調査内容や問題点の解決策をポスターに整理し、まとめる。	交流の家第8研修室
	8	発表①	7/16	16:00-16:45	表現	作成したポスターを用いて、ポスターセッションを行う。	交流の家第8研修室
地域課題の取組	9	講義・演習④「行動計画の基礎」	7/22	9:15-14:00 昼食含む	課題の設定	実践活動での行動計画を作成する。	交流の家第8研修室
	10	発表②	7/22	14:00-15:00	表現	今後の実践活動の行動計画を発表する。	交流の家第8研修室
	11	実践活動のためのガイダンス	7/22	15:00-15:50	－	実践活動上の安全管理や社会のルール・マナーを理解する。	交流の家第8研修室

③ フィールドワーク概要

羽咋市歴史民俗資料館学芸員　中野　知幸　氏

地域の獅子舞文化の現状や課題について、その魅力や情報を知り、自分事と捉えた目線で考え、地域の課題とその改善に向けた取組みを探究する。

3 成果と課題

本事業に参加した7名の生徒に、今回のオリエンテーション合宿での学びについての振り返りをしてもらった。

（1）フィールドワークでの学びについて（生徒の記述より一部抜粋）

・調べても出てこないことが、実際にその地域を訪れて、その活動に携わっている方々に話を聞くことで知ることができた。問題を肌で感じることの大切さも感じられた。

・自分たちの住んでいない地域とは違った獅子の演目や、その地域は今までどんなことをして活性化してきたのか、何に対しても挑戦することの大切さや大変さを学べた。

【トークセッションの様子】

（2）生徒のオリエンテーション合宿の学びにおける成果と課題（生徒より聞き取り）

① 成果

・他校の同士でグループを作り、課題や取組について議論を交わしたことで、新しい発見もあり、お互いに刺激を受けることができた。

・話す時に相手に伝わる話し方が大切であるため、納得させられるプレゼンテーションのコツを学ぶことができた。

・各々が出した考えをまとめて、1つのものにすることはとても難しく、根本的な事項を理解していないと話がまとまらないことがあることがわかった。

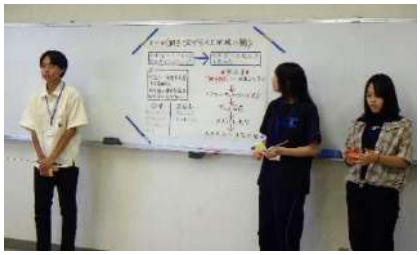
【情報マップ作り】

② 課題

・人の考えを理解するまでに時間がかかり、まとめることが苦手であることを再認識した。

・発表するスキルが低いことを自覚した。また、言語化することも苦手なので今後の課題である。

・積極的に話し合いに参加することができなかった。



【発表・質疑応答】

（3）運営面における成果と課題

① 成果

・募集に当たって、石川県内の複数の学校を訪問した。結果的には5つの学校から参加者が募り、OR 合宿を実施することができた。また、当日は、2校の先生が生徒とともに OR 合宿に参加し、本事業についての理解を深めていただくことができた。

・事業全体に対する満足度は 100%であり、課題発見力・解決力・発表力の向上に繋がったという声が多く聞かれた。

・参加者の意識が高く、課題発見や解決に向けて多様な意見があり、考えに広がりをもつことができた。

② 課題

・テーマが歴史（伝統文化）に関する内容であり、参加者にとっては身近なものではなく、自分事として捉えることが難しかった。

・時間の設定が不十分であった。意見交流が活発で多様な考えが出たこともあり、自分の考えをまとめ、発表する時間が足りなかった。特に、発表に向けて十分に準備（練習）する時間が少なかった。

「ファミリーキャンプ①～能登の自然を楽しもう～」

1 趣旨

親子で能登の海に親しみながらヨットの基礎知識や操舵を体験する。活動を通して、環境活動への関心を高める機会になることを期待する。また、施設の活動プログラムも体験することで自然への興味・関心を高め、自然体験活動の楽しさを感じる。

2 日程

（1） 期　　日　令和５年７月２２日（土）～２３日（日）　1泊２日
（2） 参 加 者　小学３年生以上の児童を含む親子　11家族31名
（3） 活動内容

７月２２日（土）【館内泊】	７月２３日（日）
８：15　受付・移動 ９：15　はじまりの会（滝港マリーナ） ９：30　Aグループ：ヨット体験 　　Bグループ：水遊び・砂像作り 12：15　昼　食　弁当 13：15　Aグループ：水遊び・砂像作り 　　Bグループ：ヨット体験 16：20　帰所・入浴 17：40　夕食　食堂 19：30　焚火タイム 20：30　自由時間・就寝	６：00　起床・清掃 ７：00　フレッシュタイム ７：30　朝食　食堂 ９：10　野外炊事（ガパオライス） 13：00　おわりの会・思い出タイム 13：30　解　散

3 成果と課題

（1）アンケート結果からの成果（おわりの会前に家族毎に記載）

① 事業の満足度は、11家族中10家族が「とても楽しかった」、1家族が「まあまあ楽しかった」という評価であった。事業全体を通して高い評価を得ることができた。

② 保護者が、キャンプ中に見えた子供の変化についての項目では、「自分からお手伝いをしてくれて、積極的に参加していた」「自分からいろんなことにチャレンジしていて、頼もしく見えた」という意見があった。特に「お手伝いをしてくれた」という回答が多くあったため、今後の家庭生活における子供の変容が期待できる。

③ 保護者がキャンプで感じたことの項目では、「自然の中での体験を通して、自分自身を成長させるいい機会になった。親として『あれダメ、これダメ』ではなく、やらせて失敗しても見守って、自信をつけさせることが大切だと感じた」という声があった。日常から離れた生活をすることで、改めて見えてくる事があり、今後の子供への接し方等に対して変化が期待できる。

（2）事業を通しての成果と課題

① イベント募集の広報としては、施設ホームページやSNSでの発信、近隣公共施設へのポスター掲示を実施するなどして呼び掛けた。その結果、予定募集数に達する応募があったため、今後も同様の募集方法が有効である（応募の８割は施設ホームページ、２割は年度初めに配布している地元向け冊子）。近隣施設へのチラシ印刷・郵送代の削減につながった。

② 家族が対象であるため、活動プログラムに余裕をもったプログラムの立案ができた。その結果、時間に追われることなく、スムーズに運営することができた。

③ 夏季の事業実施となるため、暑さ対策は毎年の課題となる。大塚製薬株式会社より協力をいただき、飲料や氷のゼリーを参加者に配布することができた。
今後も様々な状況を予測して、熱中症への準備・対策を講じていく必要がある。

「SUMMER ADVENTURE」
～仲間とともに明日へのチャレンジ～

1　趣旨

能登の里山里海で自然環境及び歴史・文化資源を活用した長期宿泊体験を通して、初めて出会う仲間とともに互いに協力し合うことで、よりよい人間関係を築き、課題解決する力を育む。

2 日程

(1)期　　日　　事　　前：令和５年７月30日(日)日帰り
　　本キャンプ：令和５月８月５日(土)～８日(火)
(2)参 加 者　　小学校5･6年生 31名
　　(5年生：男子９名、女子６名、６年生：男子８名、女子８名)
(3)協力団体　　市民活動団体「長手島」
(4)活動内容

・事前キャンプ(日帰り)

7月30日(日)
9:30 受 付
10:00 開講式 アイスブレイク
10:30 熱中症予防対策講義 講師：大塚製薬工場
11:30 昼 食
12:00 プロテクター フィッティング
13:00 サイクリング
16:00 閉講式　解散

・本キャンプ(3泊4日)

８月５日(土)【館内泊】	８月６日(日)【館内泊】
9:30　受付	5:00　起床 ・ 清掃
10:00　開講式 アイスブレイク	6:00　サイクリング(柴垣海岸)
チームフラッグ作り	6:30　海岸清掃
11:30　昼食	7:30　朝食(サンドイッチ)
13:30　いかだ体験	9:00　SUP･砂像造り体験･磯遊び
17:00　ベッドメイキング	13:00　昼食(弁当)
17:30　野外炊飯(やきそば)	14:00　サイクリング(帰所)
21:00　入浴	16:30　野外炊飯(ジャンバラヤ)
21:30　振り返り･翌日会議	19:00　入浴
22:30　就寝	20:00　振り返り･翌日会議
	21:00　就寝

８月７日(月)【宝達志水総合体育館泊】	８月８日(火)
6:00　起床 ・ 清掃	5:30　起床
7:20　朝食(おにぎり)	6:00　朝食(防災パスタ)
8:40　宿舎点検	8:00　マイクロバス体育館出発(帰所)
9:15　マイクロバス交流の家出発(宝達山)	9:30　サイクリング(次場遺跡)
10:00　宝達山登山開始　登頂後：昼食休憩	10:00　弥生人体験･火起こし体験･勾玉作り
13:30　下山開始	12:30　昼食
15:50　宝達志水総合体育館到着	14:00　サイクリング(帰所)
16:00　入浴	15:00　シャワータイム
17:00　夕食(防災カレー)　夕食後：花火	15:30　振り返り
21:00　振り返り･翌日会議	16:30　閉講式
22:00　就寝	17:00　解散

3 成果と課題

（1） 活動プログラムの実際

1. 事前キャンプ「熱中症予防対策講義」

夏季の野外活動では熱中症等が心配される。熱中症の対策として、参加者が熱中症についての知識を身に着け、自ら対策することができることが重要である。講義では、経口補水液を製造している株式会社大塚製薬より講師を招き、熱中症の具体的な症状や、飲み物を飲むタイミングなど、熱中症の危険性と対策を教えていただいた。今回の事業では、具合が悪くなる前にスタッフに自分の体調について伝える参加者がいた。最初にこの講義を受けたことにより、自らの体を意識して活動することができた。

2.本キャンプ

本キャンプでは、いくつかの活動にミッション（課題）を設定した。そのミッションを班の仲間と協力して解決することで食事や食材を得ることができるようにした。

ア.出会いのチャレンジ（仲間作りゲーム、いかだ体験）

仲間作りゲームでは、班の全員が限られた回数でフラフープに石を入れるミッションを設定した。活動がうまくいかない場面では互いに「前向きな言葉」を掛けることを意識して、ゲームのクリアを目指した。クリアした班は昼食（カートンドッグ）の材料を獲得し、班の仲間と楽しく調理しながらコミュニケーションを図っていた。

いかだ体験では、池に浮かぶ食事券を獲得するミッションを設定した。道具を運び、組み立てたり、声を合わせて漕いだりと協同する姿が見られた。1日目の活動を通して「班の友達とどうしたら昼食をゲットすることができるか考えることがとても楽しかった。」「初めて会った友達と協力していかだを組み立て、声を掛けながら食券をゲットできたからうれしかった。」という仲間を意識した感想が多かった。

イ. 能登海チャレンジ（海岸清掃・SUP体験・砂像造り体験、磯遊び）

サイクリングで海岸まで移動し、海岸清掃をした。これまでに海岸清掃を経験した参加者は少なく、海のゴミの種類の多さに驚いていた。

SUP体験では市民活動団体「長手島」に指導していただいた。何度も海に落ちながらも果敢に挑戦することで、SUP ボードにうまく乗れるようになり、やがて上手にオールを使いこなし自分の思い通りに進む姿が見られた。

砂像造りでは、与えられた課題をクリアすると昼食を得ることができるようにした。日本の有名な景勝地や交流の家のキャラクターを砂で立体的に表していた。「仲間とどのようにしたらうまく作れるか協力しながら作成することができた。」と関わりを楽しむ姿が見られた。

磯遊びでは、柴垣の海に潜り、生息する魚を捕まえた。シュノーケルを着用して海に入ったことがない参加者も多く、「初めて海の中で泳いでいる魚を見た」という声が新鮮だった。

ウ. 能登山チャレンジ（宝達山登山）

宝達山登山では、植物オリエンテーリングをしながら山頂公園を目指した。個別に植物の名前に関する問題用紙を配付し、班の仲間が全て記入することができると昼食を得ることができるようにした。班の仲間全員のワークシートが埋まるように、協力して植物を探していた。また、互いに励まし合ったり、歌を歌って元気づけたりして登頂を目指した。

エ. 弥生人チャレンジ

交流の家から吉崎次場遺跡公園までサイクリングで移動した。吉崎・次場遺跡公園では、学芸員の解説を聞きながら、遺跡を見学し、羽咋市の歴史について学ぶことができた。また、弥生人の服装と言われる貫頭衣を身に着け弥生人になりきり、火おこし体験とまが玉作りをし、弥生人の生活や文化に触れることができた。

（2）アンケート結果について

①「SUMMER ADVENTURE は楽しかったですか。」という問いに対して、「とても楽しかった」及び「楽しかった」を合わせた肯定的な回答が 100%となっており、高い満足度を得ることにつながったと考えられる。

②「弥生人・サイクリングを通してチームワークを高めることができましたか。」という問いに対して、全体の 93%が肯定的な回答であった。参加者からは、「後ろに伝言をすることができた。」「みんなに速さを合わせて行動できた。」などの声があった。チームメイトと関わりながら行動しようとする意識を持ちながら活動できたことがうかがえる。

③自由記述から、「次の日に必要なものを自分たちで考えたことが成長につながった。」という意見があった。毎日の振り返りの中で、子供だけで持ち物や集合時間などを考えた「翌日会議」を行ったことが自立への自信につながったといえる。

④「食べ物をゲットするミッションゲームが楽しかった。」という意見や、「ミッションをクリアしたときに達成感があった。」という回答があった。期間中に数多く設定したミッションが、肯定的な意見につながったことがわかる。また、活動自体に目的を与え、共通の課題に取り組ませることはグループ内の交流を活発化させていた。

（3）成果と課題

①成果

・事業満足度は、29 名中 24 名が「とても満足」、4 名が「満足」、1 名が「やや不満」という評価であった。全体としては高い満足度を得ることができた。
・事業期間中の食事をミッションのクリア報酬にしたことは、グループの団結力を高め、協力することの重要性や魅力に気付くことにつながった。アンケートには、「仲間と協力しないとできないことに挑戦できた」「ミッションがあって、意欲がわいて楽しめた」という意見があった。
・本キャンプ期間の食事は、全て自分たちで調理して用意した。調理の回数を重ねるうちに、後片付けや調理の分担などを素早く決定できるようになった。周りを見て必要な作業に取り組むことができていた。
・熱中症予防講座を全参加者が受講することで、熱中症への危険意識を高めることができた。また、十分な熱中症対策を取ることによって安全に実施することができた。
・3泊4日を通して、日を追うごとに仲を深めていく子どもたちの様子を見ることができた。同時に友好な関係を築き、理解し合うためには一定の時間が必要であると感じた。話すことが苦手な友人の発表を安心して見守り、穏やかな表情で傾聴する子どもは、期間を通して友人の特徴を理解していったと考えられる。
・参加者が、初めて出会った人と仲間になることができる、という経験を得られる時間を大切にした。「仲間づくり」のために、各活動で作戦会議の時間を意識的に設けたことは、チーム内の結びつきを強め、子ども同士が積極的に関わり合う姿に繋がった。

②課題

・猛暑により、サイクリングの活動を一部中止した。事業で利用したサイクリングロードは日陰の無い道が多かったことも中止の要因であった。
・夏季の屋外活動では、体力の消耗による飲料の消費が激しかった。事前の想定を超える量の飲料の消費により、急遽追加購入をする必要があったため、事前に想定以上の準備が必要であった。
・参加者の安全確保のために各班2名ボランティアの参加を募ったが予定人数に足りず、各班1名のボランティアで実施した。そのため、活動中にトラブルが発生した際には班全体の活動を休止することとなった。職員の到着を待つ時間が発生し、登山では班ごとに登頂までの時間が大きく異なった。
・参加者によって自転車の習熟度に差があった。事前のアンケートで「自転車に乗ることができない」という回答が1件あり、班活動時の安全を確保するため特別な対応を想定する必要があった。当日は本人の練習成果もあり安全に班で活動することができた。

4 事業の様子

（1）事前キャンプ

【熱中症予防対策講義】

【サイクリング】

（2）本キャンプ

① 出会いのチャレンジ（仲間作りゲーム、いかだ体験）

【仲間作りゲーム】

【昼食作り】

【いかだ体験】

② 能登海チャレンジ（海岸清掃、SUP体験、砂像造り体験、磯遊び）

【海岸清掃】

【SUP 体験】

【磯遊び】

【砂像造り】

③ 能登山チャレンジ（宝達山登山）

④ 弥生人チャレンジ（弥生人体験、火起こし体験、まが玉作り）

【火起こし体験】

【まが玉作り】

【弥生遺跡見学】

法人ボランティア自主企画事業

「のともキッズ 2023」

1 趣旨

五感を使った自然体験を通して、新しい発見や達成感を得る。また、グループでの仲間づくりを通して、参加者の主体性を引き出す素地を養う。

2 日程

（1）期日：令和5年8月20日（日）～22日（火）

（2）参加者：小学3年生14名（男子4名、女子10名）、小学4年生8名（男子4名、女子4名）
ボランティア9名

（3）研修内容

8月20日（日）【テント泊】		8月21日（月）【テント泊】		8月22日（火）	
9:00	受付	6:00	起床・洗面・清掃	6:00	起床・洗面・清掃
10:00	アイスブレイク	7:00	フレッシュタイム	7:00	朝食
11:30	昼食（弁当）	7:20	海岸への冒険！		（カートンドッグ）
12:30	テント設営	8:00	朝食（注文弁当）	8:30	テント撤収・点検
	入所オリエンテーション	9:00	砂像造り	9:30	森のレストラン
14:00	探検バッグ作り	12:30	昼食（食堂）	12:30	昼食（弁当）
15:30	能登を探検！	13:30	休憩・昼寝	13:30	探検記録作り！
18:30	夕食（食堂）	14:30	火付け体験		（フォトフレーム）
20:30	入浴・シャワー	16:00	野外炊飯（カレー）	15:00	ふりかえり
22:00	消灯・就寝	20:00	キャンプファイヤー	16:00	解散
			入浴・シャワー		
			消灯・就寝		

3 成果と課題

（1）活動プログラムの実際

①本部ボランティア3名、各班2名のボランティアが関わり、子どもたちの発見を促し意見を引き出していた。

②野外炊飯では、水のアクシデントがあったが、子どもたちが協力して行っていた。また、最終日の森のレストランでは、班で話し合いながら自然物を用いた“料理”を作り上げた。

（2）アンケート結果について

①教育事業アンケートの満足度（「満足」の評価）は、事業全体において72%（16/22）、事業プログラムにおいて1日目は64%（14/22）、2日目は59%（13/22）、3日目は77%
（17/22）であった。

②アンケートの記述には「チームワークをつくって協力ができたから」「上手にできなかったけど、励ましあいをすることができた」「これからもチームワークを大切にしていきたい」という意見があった。

（3）成果と課題

①成果

・広報はHPと郵送で行った。HPからは10人、知人や友人の紹介・いしかわ子ども自然学校では10人、チラシからは3人の申し込みがあった。多くの申込があり、当初18人予定の参加者を22人受け入れた。

・ボランティアでは、他施設のボランティア2名が参加した。

②課題

・今年度に入ってから、事業実施が決まったため、準備の時間が足りない面もあった。次年度の事業を検討する際に合わせて実施を検討する必要がある。

・広報計画などをボランティアと年度当初にすり合わせ、早め早めの行動になるよう、声かけを行う必要がある。

4事業の様子

【ネイチャーゲーム】

【砂像造り】

【森のレストラン】

【キャンプファイヤー】

【集合写真】

羽咋市教育委員会連携事業

「HAKUI キッズイングリッシュキャンプ」

1　趣旨

仲間との英語を用いた体験活動を通して、楽しく音声や基本的な表現に慣れ親しむ。また、安心できる温かい環境の中で、自分の考えや気持ちを英語で表現し、積極的にコミュニケーションを図る素地となる能力の育成を図る。これらのことが自信となり、日常生活において主体的に英語でコミュニケーションを図ることにつなげることをねらいとする。

2 日程・内容

(1)期日・参加者等　※複数校で、5・6年生に分かれて合計 4 回実施

	期日	参加校	児童	国際交流員・ALT	ボランティア
第1回	9月 6日(水)・7日(木)	羽咋小・邑知小(6年生)	55・25 名	6・2 名	1 名
第2回	9月12日(火)・13日(水)	羽咋小・邑知小(5年生)	61・20 名	6・2 名	3 名
第3回	9月14日(木)・15日(金)	粟ノ保小・西北台小 ・瑞穂小(6年生)	9・15・24 名	4・2 名	5 名
第4回	9月21日(木)・22日(金)	粟ノ保小・西北台小 ・瑞穂小(5年生)	16・7・28 名	4・2 名	1 名

(2)活動内容

<6年生>

1日目		2日目	
9:00	Opening ceremony【1時間】 アイスブレイク 「世界にある魅惑的な寺院」(妙成寺見学)【2時間】	9:00	アイスブレイク【0.5時間】 共通プログラム【3 時間】 「現地の食材を探しに世界へ」 《Entry to a country check》
12:00	昼食(持参弁当)	12:30	昼食(食堂)
13:00	共通プログラム【2.5時間】 「世界で遊ぼう」 《Become a game master!》	13:15	振り返り
		13:30	Closing ceremony
15:30	振り返り	14:00	帰路
16:00	帰路		

<5年生>

1日目		2日目	
9:00	Opening ceremony【1時間】 アイスブレイク 「世界にある魅惑的な寺院」(妙成寺見学)【2時間】	9:00	アイスブレイク【0.5時間】 共通プログラム【2.5時間】 「現地の食材を探しに世界へ」 《Shopping Games》
12:00	昼食(持参弁当)	12:30	昼食(食堂)
13:00	共通プログラム【2.5時間】 「世界で遊ぼう」 《Enjoy the game!》	13:15	振り返り
		13:30	Closing ceremony

15:30	振り返り	14:00	帰路
16:00	帰路		

1日目

○Opening Ceremony

児童が英語を使って司会を行った。「Stand straight（気をつけ）」「bow（礼）」等の号令や児童代表のあいさつも英語を取り入れて行った。スタッフの自己紹介後、イングリッシュキャンプで意識して欲しい5つのルールについて伝えた。

複数校合同活動であったため、その後の仲間づくり（アイスブレイク）の活動が有効であった。

○Activity1 「妙成寺見学」

国指定の重要文化財である妙成寺を見学する際には、地域の歴史や文化への理解を深めるために、順路に従い建物の名称・建立年・特徴等を国際交流員から参加者に英語で説明した。また、各国の歴史的建造物についての紹介等を通して、他国のものの見方・考え方、文化にふれる機会を得た。

※羽咋小・邑知小（6年生）と粟ノ保小・西北台小・瑞穂小（5年生）は、天候不良のため交流の家で「English Mission Game」を実施した。英語でコミュニケーションを図りながら、グループで協力し、課題をクリアした。

【妙成寺見学】

○Activity2−1 「Become a game master!」（6 年生）

外国の伝統的な遊びを体験することを通して、国際交流員や参加者同士のコミュニケーションを図るとともに、各国の文化について理解を深めることができた。また、基本的な英語を使って積極的にコミュニケーションを図った。グループの代表者が、体験するゲームの遊び方をあらかじめ国際交流員から教えてもらい、その後、ポイントワード（3語）を利用しながら英語で自分のチームに遊び方を説明した。

【Become a game master!】（6 年生）

○Activity2−2 「Enjoy the game!」（5年生）

外国の伝統的な遊びを体験することを通して、国際交流員や参加者同士のコミュニケーションを図るとともに、各国の文化について理解を深めることができた。基本的な英語を使って積極的にコミュニケーションを図った。国際交流員からゲームの遊び方を教えてもらい、グループ内でポイントワード（3語）を利用しながら作戦を伝えたり、仲間を称賛したりした。

「Enjoy the game!」（5年生）

2日目

○Activity3−1 「Entry to a country check」（6年生）

昼食の食材や調理器具等を世界へ買い物に行くという場面設定をした。国際交流員等は入国審査員や店の店員になりきり、英語を用いて、入国審査やアメリカドルでの商品販売を行った。買い物では、5年生の時に経験した値段交渉の表現を追加して買い物をした。参加者は国際交流員とのコミュニケーションから、各国の観光名所や食べ物を聞きとり、出国審査の際には、思い出に残った観光名所や食べ物について英語で表現した。

「Entry to a country check」(6年生)

○Activity3−2
「Shopping Game」(5 年生)
　参加者は昼食の食材や調理器具等を、国際交流員等が開く店に行き、英語や動作を使って買い物した。初めにアメリカドルについて理解を深め、紙幣や硬貨が日本の円と違うことを確認した。買い物時に使う基本的な英語表現を確認し、練習した後、一人で買い物に行った。前半は初めに確認した表現を使って買い物をし、後半は値段交渉の表現を追加して買い物をした。

○Closing Ceremony
　児童が英語を使って司会を行った。参加者、国際交流員、ボランティアスタッフ等で振り返りを行い、お互いに感想を伝え合った。

「Shopping Game」
(5 年生)

(3)事業の実施にあたって
<他団体との連携>
① 羽咋市教育委員会
　平成31年3月より連携協定を結んでおり、本事業の内容等について前年度中に協議検討を行った。今年度は、能力別活動及び他校との交流を行いたいとの要望を受けて、複数校で小学6年生と5年生に分かれて実施した。実施にあたり、外国人スタッフの確保のために、市内小中学校に勤務するALT等の協力をいただいた。

② 実施小学校
　今年度初めて複数校合同実施のため、打ち合わせ日時の調整が難しかった。オンラインや指定された学校に集まり、各担当の先生方とプログラムの内容やタイムスケジュール等について打ち合わせを行った。また、活動プログラムは各学校の実態や要望を聞きながら決めた。班分けや係決め等については、担当の先生同士が相談し、事前交流学習や、当日の始まりの時間に決めてもらうように依頼した。
　昨年度までは、事前指導で担当の先生方にお願いしていた「使って欲しい英語表現」を今年度は家庭でも取り組めるように児童が持つタブレット端末からゲーム感覚で学習できるようにした。事前、事後アンケートもタブレットを活用し、学校で行った。

③ 石川県国際交流協会(研究協力者:石津みなと)
　児童が体験活動を通して、主体的に英語でコミュニケーションを図ろうとする仕組み作りについて、随時相談した。特に、安心して活動に取り組む環境や自分の考えや気持ちを英語で表現しやすくなる工夫について、専門家の視点からアドバイスをいただいた。第4回では、現地で直接アドバイスをいただいた。

<熱中症・新型コロナウィルス感染症対策>
① 当初1泊2日で計画していたプログラムを日帰り2日間のプログラムに変更した。
② 持参弁当及び野外炊飯は中止し、食堂利用とした。
③ 参加者の健康観察を徹底した。

<2日間を通した活動の工夫>
① 使ってほしい英語表現
　能力別で実施したため、5年生では昨年同様に「使ってほしい英語の表現15」としたが、6年生では「使ってほしい英語の表現15+5」とレベルアップした。さらに、事前学習で

児童がタブレットを使いゲーム感覚で家庭でも取り組めるようにした。事業当日は国際交流員等が、午前と午後の始まりに児童と一緒に練習したため、正しく意味を理解し、いろんな場面で自信を持って使うことができていた。

②「リピートしますカード」、「同時通訳カード」等の便利アイテム

班活動で内向的な児童に対して、チャレンジできるきっかけとして便利アイテムを各班のスタッフが常時携帯し、状況に応じて使えるようにした。もう一度、言ってほしいときに使う「リピートしますカード」や英語を日本語に訳してほしいときに使う「同時通訳カード」等、気持ちを伝えやすくする便利アイテムをファイルにまとめた。

③活動プログラムのゲーム要素

2日間を通して、児童一人一人が意欲的に活動できるように主となる3つの活動プログラムにゲーム的要素を持たせた。Activity1「妙成寺見学」では、見どころをクイズ形式にして理解を深めた。Activity2「世界であそぼう」では、国際交流員等から教えてもらった世界の遊びを一緒に楽しんだ。Activity3「現地の食材を探しに世界へ（Shopping Games）」では、買い物リストの全てを決められたお金（US ドル）で買うことができるよう、値下げ交渉のフレーズを覚えて使っていた。それぞれの活動にゲーム的要素を持たせることで、どの活動でも意欲的に活動する児童の姿が見られた。また、課題を解決する場面では、相談したり、アドバイスし合ったりする姿も見られた。

④一人一人の会話量の確保

一人一人が国際交流員等と直接会話できる場を確保するために活動内容の工夫をした。

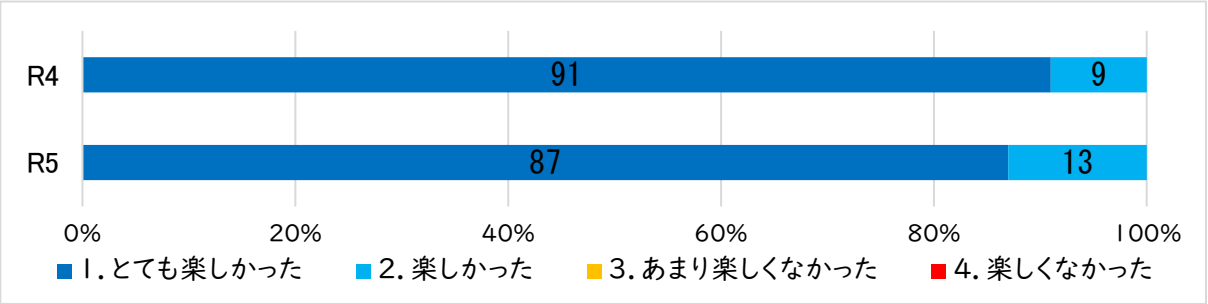
Activity1「妙成寺見学」や「English Mission Game」では、児童一人一人が自分の名前や誕生日、好きな色を聞き合うことでクリアできる課題や、国際交流員等と英語で会話することでクリアできる課題を設定した。Activity2「Entry to a country check」や「Shopping Game」では、出入国審査や買い物は1人で行うことにした。初めは不安な様子の児童も見られたが、回数を重ねることで自信を持って会話する姿が見られた。また、グループ内で待っている児童が買い物場面を想定し、練習する姿も見られた。各 Activity で、一人5回程度は国際交流員等と1対1で会話する機会を、設定することができた。

3 成果と課題

(1)アンケート結果

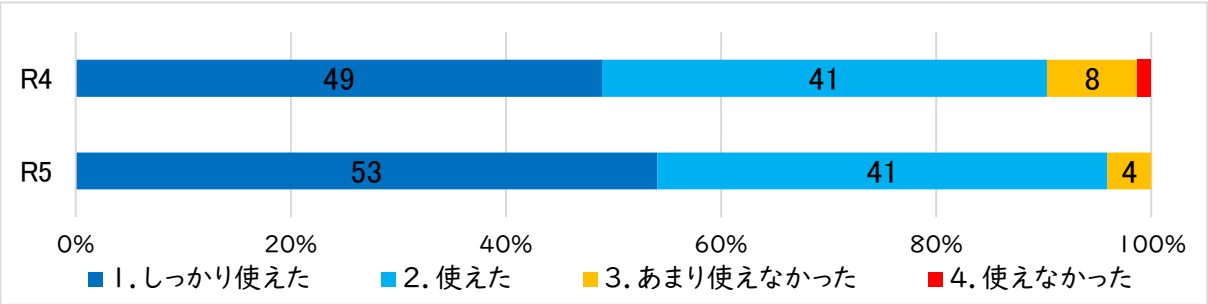
①事業について

・イングリッシュキャンプは楽しかったですか。



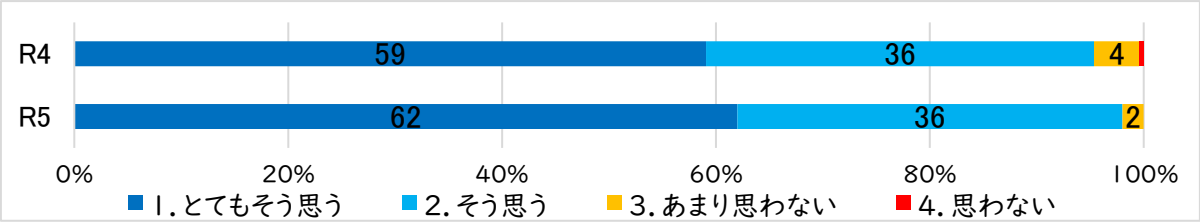
「とても楽しかった」及び「楽しかった」をあわせた肯定的な回答率が 100%となっており、楽しく活動できたことがうかがえる。昨年度と比較すると、「とても楽しかった」の割合が減っている。

・「つかってほしいえいごのひょうげん」はつかえました



「しっかり使えた」及び「使えた」をあわせた肯定的な回答率が94%となっており、多くの児童が英語を使って活動できたことがうかがえる。今年度は事前学習で児童がタブレットを使いゲーム感覚で家庭でも取り組めるようにしたことにより、昨年度と比較すると、「しっかり使えた」の割合が大きく増えたと考える。

・5つのルールは、守れましたか。



「とてもそう思う」及び「そう思う」をあわせた肯定的な回答率が98%となった。できるようになったことが多く、主体的に取り組むことでキャンプを通して自分自身の成長を実感できたのではないかと考えられる。

② 外向き志向率、グローバル人材志向率

本事業では国際交流に対する意識を調査するために、外向き志向率及びグローバル人材志向率に関するアンケートを実施した。

<外向き志向率について>

外向き志向率とは、日本人参加者に対して、文部科学省が定めた調査項目「日本人として世界に貢献したいと思いますか」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか」「交流した外国人と将来も繋がりを持ちたいと思いますか」の3項目のアンケート結果を集計したものである。そのうち、肯定的な回答の集計から算出した本事業参加者の外向き志向率は、87%であった。(R3 92%、R4 88%)

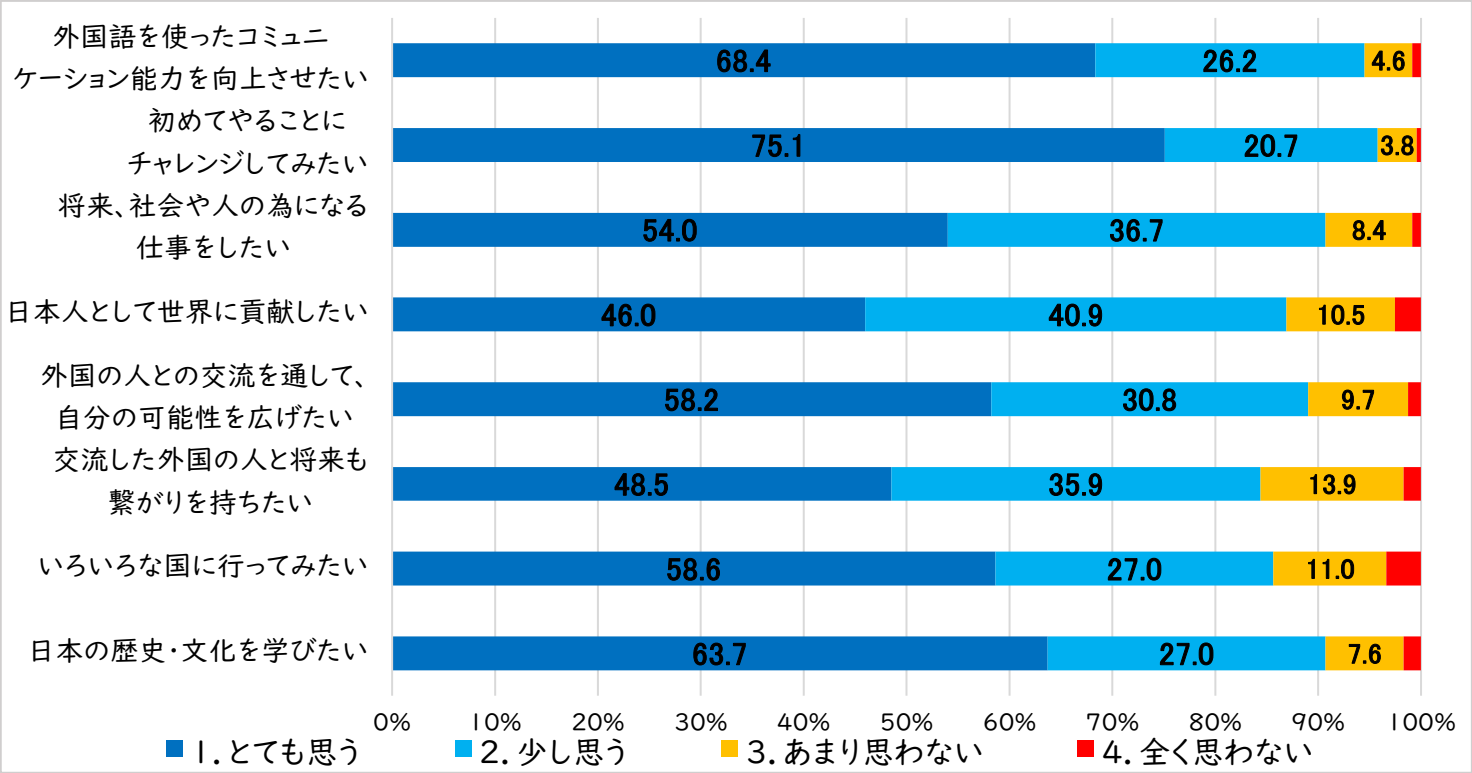
事前と事後の結果を比較すると、事前84%、事後87%と少し向上した。特に、「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか」の項目で「とてもそう思う」の割合が48.1%から 58.2%と大きく向上した。

<グローバル人材志向率について>

国立青少年教育振興機構では上記の外向き志向率調査に加え、独自に語学力・コミュニケーション能力及び異文化に対する理解と日本人のアイデンティティ等を加えた8項目のアンケートを作成し、「グローバル人材志向率」として、平均80%以上の肯定的回答を得ることを目標に国際交流事業を実施している。

本事業においては、事業後のグローバル人材志向率は、90%であった。(R3 93%、R4 92%)

事前と事後の結果を比較すると、事前 89%、事後90%と少し向上した。特に、「いろいろな国にいってみたい」の項目で、事前 51.9%、事後 58.6%と大きく向上した。



③参加者の声（一部抜粋）

【全体】

・自分で英語の表現をしたり、チームで協力してアクティビティをしたりすることができたので良かったです。また、いろいろなことに挑戦できました。これからもいろいろなことに挑戦していきたいです。（6 年生）

・チャレンジの大切さと、一秒の勇気の大事さを知ることができました。チャレンジの大切さでは、自分が出来ないと思っていることでも、挑戦することで、自分の知らなかったことを学べて、自分の成長にもつながるので、これからも日常生活や学校生活でもチャレンジしていきたいです。そして、一秒の勇気の大事さでは、いろいろなことに活かせると思います。例えば、なにかを決心するときや重要な物事を決めるときにも一秒の勇気を大切したいです。（6 年生）

・班の人とも仲よくなれて嬉しかったし、妙成寺見学や世界のゲームやショッピングゲームをしてとても楽しかったです。（5年生）

・瑞穂小、西北台小の生徒と仲を深められてよかったです。最初は緊張して話すことが難しかったです。今度は自分から話にいきたいです。多種多様な英語を知れたり、海外のことを知れたりしました。特に、アメリカ合衆国のすしの言い方が、日本とは全然ちがうことに驚きました。来年の English camp が楽しみです。（5年生）

【妙成寺見学（English Mission Game）】

・妙成寺は、知っていると思っていたけど、見たことのないところや英語で場所の説明をしてもらうとまた 1 からわかったような気がして楽しかったです。また、妙成寺には、重要文化財が 10 個もあってすごいところが羽咋市にあるとわかって誇らしく思いました。（6 年生）

・私は、Mission Game が楽しかったです。これからの生活には、クリアボイス、スマイル、リッスン活かしていきたいです。（6 年生）

・ミッションゲームでは、チームの人とミッションクリアすることができました。そして、このゲームで詳しくチームの人の誕生日などがしれました。来年のイングリッシュキャンプもたくさんの人と仲良くなりたいです。（5年生）

【Become a game master!（6 年生）】

・楽しかったことは、世界で遊ぼうのボッチャのようなゲームです。なぜなら「投げる」、「たたかう」、「近い」などの言葉を習えたのでそれを活用していきたいです。

・世界の遊び体験が楽しかったです。自分の知らない遊びがたくさんあってワクワクしました。英語でコミュニケーションすることが難しかったです。なので、これから英語の勉強を頑張ろうと思いました。

【Enjoy the game!（5年生）】

・僕は世界の遊びのモルックが 1 番面白かったです。相手のチームととても接戦でとてもハラハラしました。またこのような世界の遊びに触れていきたいです。

・いろいろな国の遊びができて面白かったし、楽しかったです。今まで分からなかった英語が分かったので、これからも使いたいです。

【Entry to a country check（6 年生）】

・材料を買うゲームではお世辞を言ったり、値引きしてもらったりして、お金のことも考えながら買い物できた。帰国離陸の英語もわかったので良かったです。最後のイングリッシュキャンプも楽しく「チャレンジ!!」できたので良かったです。

・わたしは、まだ、一回も海外に行ったことがなかったので、パスポートのやり取りがしれたので、海外に行くのが楽しみになりました。

【Shopping Game（5年生）】

・ショッピングゲームでいろいろな英語を話せてとても楽しかったです。次は English キャンプで泊まりたいなと思いました。

・わたしは、食材を集めるのが楽しかったです。グループのみんなで、お金を出して欲しい物を英語で言って買うからいつものお買い物ではなくて、外国のお店に行ったような感じで楽しかったです。

【スタッフ（国際交流員・学生）との交流】

・今まで知らなかった英語も外国人と触れ合ってたくさん知れた。もし、外国に行くことがあったら知った英語を使ってコミュニケーションをとりたいです。（6 年生）

・外国人と話せたのがとっても楽しかったです。また外国人と喋ってみたいなと思いました。中学生になったら英語を本格的にやっていくので、そのときに生かしたいなと思いました。中学校にいっても英語を頑張って勉強します。単語などもたくさん覚えて、外国人のリアムさんともっとたくさん喋りたいなと思いました。（6 年生）

・食材の買い方が分かったから、英語の先生と会話できるように、さらに努力して、外国人の方々と喋れるようになりたいです。（5年生）

・私は初めてあった人と、初めてじゃない人がいて仲良くなれて良かったです。そして、外国のナッシュ、スザン、クミコ、マッシュー、レイ、セレステとも仲良く優しく話してくれて、言えてよかったなと思いました。（5年生）

【自己成長】

・英語を少しだけ話せるようになった。はじめは、全然英語を喋れなかったからです。これから頑張りたいことは、英語の時間で英語を少しでも多く喋ることです。（6 年生）

・覚えた英語が増えたので嬉しかったです。いろんなことに挑戦して自分の限界を超えてみたいと思いました。（6 年生）

・色んな国の様々な遊びが知れて、友達や家族とやってみようと思いました。イングリッシュキャンプを通して、他の国の色んな事を調べて、英語を学んで、外国に行ってみたいと思いました。（5年生）

・知らなかった英語をたくさん知れたし、あんまり関わらなかった人ともたくさんしゃべれたので良かったです。これから、英語をもっと勉強して楽しみたいです。（5年生）

④引率者の声（一部抜粋）

・3 校合同で活動することができ、他の学校の児童と関わる機会があり大変良かった。（6 年生）

・国際交流員の方やボランティアの方が児童と多く関わってくださったことで、活動が充実したものになっていた。（6 年生）

・英語を伝えるよう工夫を凝らした活動が多く、英語を使おうとする場面がたくさん見られた。（6 年生）

・いろいろな国の交流員の方と活動を通して関わることで、多様な国の文化にふれることができた。（5年生）

・他校との合同での開催ということもあり、よい緊張感の中で学び、新たな刺激をたくさんもらうことができました。たくさんの成果もあり、貴重な経験になりました。（5年生）

・いろいろな国の交流員の方と活動を通して関わることができたので、多様な国の文化に触れることができた。（5年生）

(2)成果

①外向き志向率が87%、グローバル人材志向率が90%と高い数値を示していることから、本事業の活動プログラムは児童の外国語でのコミュニケーションに対する興味・関心を高めるとともに、「外向き志向」向上に有効であったと言える。

②複数の小学校が合同で実施したことにより、近隣の同じ小学生と仲が良くなることに大きな喜びを感じることができた。同様に、国際交流員等への関わりも児童が主体的になったと考える。

③能力別活動を学年別としたことは、児童や引率者にとっても分かりやすく取組みやすかった。

④「使ってほしい英語の表現」を各小学校で事前指導したり、タブレット端末を使いゲーム感覚で取り組んだりしたことにより、「しっかり使えた」及び「使えた」児童の割合が増えた。

⑤児童が国際交流員等と1対1で会話する機会を意図的に設定したことで発言の機会が保証された。これらのことにより、英語でコミュニケーションをすることの達成感を感じ、自信を持つことができたと考えられる。

《研究協力者のコメント》

◇事業連携について

・本プログラム（「HAKUI キッズイングリッシュキャンプ」）を実施するにあたり、国立能登青少年交流の家、羽咋市教育委員会、市内小学校 5 校が連携する体制構築ができており意義あるプログラムになっている。

・キャンプに参加する5、6 年生がキャンプ参加のための事前活動を経て当日を無理なく迎えることができている等、3者の連携が教育効果を高めることにもつながったと考える。

◇プログラムについて

・プログラムを大きく3活動（1 日目午前を「妙成寺」、1 日目午後を「世界の遊び」、2 日目午前を「買い物」）に分けたことで、参加生徒が英語活動のハードルに対し尻込みすることなく興味関心を持ち、また集中力を切らさず参加できたと思われる。有効なプログラムであったと、アンケート結果からも伺える。

◇異文化理解とコミュニケーション能力の向上について

・「世界の遊び」や「買い物」の実技を通し、異文化へ関心が示されていた。体を動かしながら異文化理解やコミュニケーションをとる有効性が確認されたと言える。

(3)課題

①「妙成寺見学」は野外での活動のため、天候によって実施できないことがあった。

②近年は9月に猛暑日が多くあり、事業を日帰りに変更することが続いている。今回は野外炊飯も中止となった。そのため、実施時期を検討する必要がある。

③班分けについて、能力別を取り入れたが、学校側は人間関係を重視して安心した生活ができる班を希望している。

④交流の家で行われる事業と各学校での授業の連続性をどのように持たせるか、主体的・対話的な学びを深める連携が求められる。

⑤各回に必要なボランティア数を確保することができず、施設職員の負担が多くなった。来年度はボランティア募集について公募時期等を早めに行い、確保する必要がある。

《研究協力者のコメント》

◇異文化理解を「深める」、コミュニケーション能力を「高める」ための工夫について

・異文化理解を「体験する」ことはアンケート結果からも十分できたことがわかる。今後は理解を「深める」ため、またコミュニケーション能力を「高める」工夫に進んではどうか。具体的には、5、6 年生が活動の振り返りをする活動をプログラムに入れておく、「異文化」との共通点・相違点へ注目する仕掛けを準備しておく、複数年で取り組みが完成する仕組みを作る、など行えるのではないか。

（例）「妙成寺の活動」

学年	内容
4 年生時	学校単位で「妙成寺」について探究活動を行う（羽咋小では行っているよう）
5 年生時	国際交流員が「やさしい英語」やイラストなど活用して妙成寺について説明し、5 年生はその内容理解に挑戦する
6 年生時	6 年生がグループで分担しながら「やさしい英語」で国際交流員に妙成寺を紹介できるようになることを目指す

（例）「世界の遊び」

学年	内容
5 年生時	体験を重視する。競技の説明は「やさしい英語」で行う
6 年生時	日本の遊びとの共通点や相違点を考え、その背景となる文化について考え「発表」、「共有」する

※文化背景を考える際には、国際交流員や学校の先生にインタビューを行う等、他者とのコミュニケーション

を積極的に奨励してはどうか。この時の「発表」、「共有」活動は日本語で行なってかまわない。また、場合によっては「発表」「共有」は、キャンプ終了後各学校の英語の時間に行ってもよい。

◇役割分担の工夫について

・ファシリテーター、司会進行、グループリーダーと運営を三層にわけ、役割分担を明確にすることで、英語シャワーの環境づくりと参加する５年生、６年生の言語理解のいずれをも担保する。

（例）

全体のファシリテーター	国立能登青少年交流の家スタッフ	必要に応じ日本語・英語を使用しながら参加小学生のモチベーションやグループ作りをはじめ１泊２日の活動全体の環境づくりを行う
３活動それぞれの司会進行	ALT（国際交流員）が一人ずつ担当	司会進行者は、「やさしい英語」のみで話し、イラストやレアリア、繰り返し、ティーチャートークといった第二言語教育の知見を活用して進める
グループリーダー	国際交流員	各グループのリーダーを務め、司会者の話や活動内容についてグループの小学生がわからないときは、英語ないし日本語でフォローする

※9 月 22 日（金）「粟ノ保小・西北台小・瑞穂小（5学年）」の二日目、国際交流員による各国の紹介を行った際に、イギリスについてマシュー先生が「やさしい英語」で紹介したケースが参考になる。

◇プログラムの質の充実のために

・一層の連携強化が求められると考える。

（１）キャンプと通常授業との連携

「HAKUI キッズイングリッシュキャンプ」の１泊２日が児童にとって、学校での授業とどのようにつながるか検討してはどうか。そのためには、通常授業の見学や ALT、クラス担任との情報交換を行うことが必要になると思われる。

（2）運営スタッフや学校の先生間の連携

当日の運営について、国立能登青少年交流の家スタッフと国際交流員、ボランティアスタッフ、学校の先生との密な情報交換が求められる。グループ活動が中心になり、またグループが英語のレベル別に作られている（とてもいいことだと思います）ことから、グループリーダーとなる国際交流員、ボランティアスタッフの存在は大変重要になる。プログラム全体を理解した上で、運営スタッフや学校の先生が個別に対応してもらえるよう連携が必要になる。

◇今後について

・各活動の「やさしい英語」による説明文づくり

・イラストや写真等「英語シャワー」を補助するツールの準備

・学校でおこなわれる英語教育のカリキュラム共有や授業見学による3者の共通理解促進

「能登オープンデー」
～楽しもう！交流の家で～

事業の概要

1 趣　　旨　様々なブースでの体験を通して、自分の手で作る喜びや体を動かす楽しさなどを感じ、豊かな心情を育てる。また、参加者が主体的に活動に取り組める工夫をし、本事業で体験したことを私生活などに活かす一助とし、体験活動への理解を深める。

2 期　　日　令和5年 10 月 14 日（土）～15 日（日）

3 参 加 者　宿泊 109 名　日帰り 56 名　計 165 名

4 協力団体　北陸モバイルプラネタリウム、みずみずらんど、バルーンのぶんちゃん、いしかわ絵本専門士の会とらいあんぐる、etc.works、いしかわ子ども交流センター、中村屋、カフェ珈琲ボランチ号、テンプルファーム、サンライズ。ドーナツ、コンパスグループジャパン、国立立山青少年自然の家、国立若狭湾青少年自然の家

5 内　　容　テント泊、カヌー、アーチェリー、カッター、いかだ体験、ポット砂像づくり、ディスクゴルフ、プラネタリウム、あそべる水族館、遊びリンピック(9種目)、どこでも絵本文庫inのと、バルーンアート、野外活動体験、クラフト体験、秋の味覚ビュッフェ、薪割り体験、火起こし体験、たき火体験、わたがし、マイクロバス運転席乗車体験、ボディペイント体験、記念写真コーナー

6　事業の様子

【いかだ体験】

【カヌー体験】

【プラネタリウム】

【遊びリンピック】

【記念写真コーナー】

【火起こし体験】

「ヒノビィと一緒 通学合宿」
～仲間と一緒に生活習慣を身に付けよう～

1 趣旨

能登青少年交流の家での集団宿泊生活や生活体験活動を行いながら、普段の学校生活を送ることを通して、望ましい生活習慣や学習習慣を身に付けさせるとともに、社会性や協調性を育てる。

2 後援・協力

羽咋市教育委員会
宝達志水町教育委員会
志賀町教育委員会
中能登町教育委員会

3 対象

小学校 3～6 年生

4 参加校・参加人数

	学校名	期間（2 泊 3 日）	参加人数
1	羽咋市立西北台小学校	10月23日（月）～25日（水）	24名
2	中能登町立鳥屋小学校	11月 6日（月）～8日（水）	31名
3	中能登町立鹿西小学校	11月15日（水）～17日（金）	18名
4	志賀町立志賀小学校	11月27日（月）～29日（水）	38名
5	羽咋市立邑知小学校	11月29日（水）～12月1日（金）	61名
6	宝達志水町立宝達小学校	12月 6日（水）～8日（金）	6名
7	羽咋市立粟ノ保小学校	12月13日（水）～15日（金）	29名
8	羽咋市立羽咋小学校	1月17日（水）～19日（金）	中止
9	羽咋市立瑞穂小学校	1月 22 日（月）～24 日（水）※12/11～12/13 変更	中止
		合計	207 名

能登半島地震の影響により、1月以降の通学合宿は中止とした。

5 日程

第1日目		第2日目		第3日目	
		6:00	起床・身支度・清掃	6:00	起床・身支度・清掃
		6:50	朝　食	6:50	朝　食
		7:25	バスで登校	7:25	バスで登校
		8:00	学校生活	8:00	学校生活
17:45	受　付				
18:00	出会いのつどい オリエンテーション	16:15	バスで下校	放課後	学校から帰宅
		17:00	イブニングタイム、学習、国際理解タイム等		
18:30	夕　食	18:30	夕　食		
19:00	学習（宿題・自学）等	19:00	学習・自由時間		
20:00	入　浴	20:00	入　浴		
21:00	翌日の準備	21:00	翌日の準備		
21:30	就　寝	21:30	就　寝		

6 活動内容

〇学習の様子

下校後は、参加者全員で集中して宿題に取り組んだ。下級生の音読を聞く上級生の姿や難しい問題に友達と挑戦する姿など、課題に対して一生懸命取り組んでいた。

○国際理解タイム（イブニングタイム含む）の様子

イブニングタイム（夕べの集い）では、語学研修で施設を利用しているベトナムの方々と交流した。「シンチャオ（こんにちは）」「カムオン（ありがとう）」などベトナム語を学ぶ中で関わりを深めた。また、キンボール、ペタンク、モルックなど世界の遊びを通して、仲間との関わりも深めることができた。

○食事の様子

夕食・朝食は、バランスのよい食事を摂るように努めていた。また、食品ロスにならないように残さずに食べる姿や苦手な物もがんばって口にする姿が見られた。友達と一緒に食べることが楽しいようで、たくさんの笑顔を見ることができた。後片付けでは、協力してテーブルをきれいにする姿も見られた。

○宿舎での様子

宿舎では、協力しながらベッドメイキングや掃除をした。宿舎割を縦割りにしたことで、上級生が下級生をリードして活動する姿や、下級生が上級生に対して「教えて」「ありがとう」と分からないことを聞いては、お礼を言う姿が見られた。また、就寝時間、起床時間を守って生活しようとする意識が高く、早寝早起きの生活習慣の定着につなげることができた。

7 成果と課題

○事業評価アンケートでは、総合的な満足度は「楽しかった」92.5%、「やや楽しかった」7.5%となっており、肯定的評価が100%となった。多くの子供たちが楽しみながら活動することができた。また「来年も参加したい」という感想も多くあった。集団宿泊生活をしながら規則正しい生活を送り、学習にも取り組むことができたと伺える。

○最終日は登校までの時間で、施設の清掃を十分にできない。来年度は、最終日を土曜日に当てることによって、宿舎点検をしっかりとするとともに、午前中に活動プログラムを組み込んで参加者のかかわりを深めることができるようにしたい。

「幼小いっしょに！のとまり会」

1　趣旨

小学校に入学したばかりの子どもが、周りの児童と良好な人間関係を築けず、学校生活になじめずにいる状況を問題と捉え「小1プロブレム」と呼ぶ。本事業では、こうした問題へ対応できるよう、低年齢期における異年齢集団での共同生活体験を通して、「自立心」「協同性」「思いやりの心」を育み、何事にも自信を持って取り組む子を育てる。小学校入学を機に子どもの生活リズムや環境に変化が生じ、保育園や幼稚園時代と比較して仕事と子育ての両立が難しくなると言われる「小1の壁」。本事業では、子どもの姿や講話などを通して子育てについて学んだり、保護者同士が情報交換を行ったりする機会を設ける。地域や年代を超えた保護者同士のつながりを構築し、子育てへの思いを共有する場とする。

2　日程

（1）期　日　【第1回】令和5年10月22日（日）　日帰り
　　【第2回】令和5年10月28日（土）～29日（日）　1泊2日

（2）参加者　【第1回】年長児14名、小学1年生7名、小学2年生11名、保護者34名
　　【第2回】年長児13名、小学1年生7名、小学2年生11名、保護者37名

（3）研修内容

10月22日（日）【日帰り】	
10:00～受付 10:30～はじまりの会　（アイスブレイク①） 11:00～なかよしタイム（アイスブレイク②） 11:45～昼食	
【子ども】 13:00～なかまでフードハントゲーム 13:40～クレープ作り 14:30～保護者と会食	【保護者】 13:00～子育てのとトーク（トークセッション） 講師：小林　真氏（富山大学　教授） **14:30～子どもと会食**
15:00～おわりの会　ふり返り ふり返り後　解散	

10月28日（土）【館内泊】	10月29日（日）
11:00～受付 11:30～はじまりの会（アイスブレイク③） 12:00～昼食 13:30～なかまと歩こう　のとウォーク（往路） 14:15～なかまと協力！　砂像づくり 15:45～なかまと歩こう　のとウォーク（復路） 17:00～イブニングタイム 17:30～ベッドメイク・入浴準備 18:00～夕食 19:00～入浴 20:00～就寝準備 20:20～絵本の読み聞かせ 講師：絵本専門士　赤池氏・浜田氏 21:00　就寝	6:00　起床・洗面・掃除 7:00～フレッシュタイム 7:30～朝食 8:40～宿舎確認 9:00～ハロウィンパーティー大作戦 Part1 秋の自然探検・ハロウィン衣装づくり 11:00～ハロウィンパーティー大作戦 Part2 なかまと作ろう！カートンドッグ 12:30～ハロウィンパーティー 成功させよう！なかまといっしょに お家の方をおもてなし！ 14:00～終わりの会　振り返り

3　成果と課題

（1）活動プログラムの実際

①フードハントゲーム【子どもプログラム】

異年齢の集団で協力し合いながら「協同性」を育むプログラムである。

フードハントゲームは、施設建物の写真を手掛かりに、その場に行き、食材カードを探すゲームである。年長児・1年生・2年生3～4人によるグループ編成を行い、午後の活動「クレープ作り」に必要な食材カードを集めることにした。食材カードを集めれば集めるほど、班の仲間と作るクレープの具材が増えるため、どの方向に進むべきか班の仲間と相談したり協力したりして、仲間と一緒に力を合わせて取り組む第一歩を踏み出すことができた。

【フードハントゲーム】

②トークセッション

保護者同士の「つながり」「共有」を支援するプログラムである。富山大学教授の小林真氏を講師に招き、「子育てのとトーク」と題してトークセッションを実施した。事前に実施したアンケート結果を「社会的スキル」「育児ストレス」「幼小の接続」の3つに分類・整理し、対話の視点とした。日頃の子育てについて子どもと同じ班の仲間と対話することで、抱えている悩みや不安が固有の悩みではなく、誰もが感じているものだということに気付いていた。特に少子化が進み、保育者や教員とのつながり、保護者同士のつながりが少ないと感じる保護者ほど、対話による共有の効果を感じていた。小林教授から「自然体験を通して育まれる感性や人間関係調整力」について、自身が携わる先進事例を紹介しながら、本事業の意義や期待される効果について説明があり、本事業に対する保護者の理解がより深まった。「子どもとの普段の接し方を見直そう」「ずっと言えない悩みがあったが、他の保護者に話を聞いてもらって少し楽になった」等、子どもとの関わり方や保護者同士のつながりについての感想が多かった。

【トークセッション】

③クレープ作り

「協同性」「思いやりの心」を育むプログラムである。子ども達は、フードハントゲームで集めた食材を使い、自ら調理したクレープを保護者へプレゼントした。仲間と協力して、道具の準備や調理をするとともに、保護者に日頃の感謝の気持ちが伝わるように心を込めて焼き上げ、デコレーションするなど、世界に一つしかない特別なクレープ作りに取り組んだ。

保護者は、子ども達が調理する姿を見て「子ども達だけで力を合わせて作るなんてすごい」と驚き、子どもからクレープと言葉のプレゼントをもらって感激した様子だった。また、保護者も、半日子どもと離れて感じた思いを子どもに伝えるなど、親子間での温かな交流の場にもなった。

【クレープ生地焼き】

【デコレーション】

【保護者へのプレゼント】

④なかまと歩こう のとウォーク（往復約 6 ㎞）

「協同性「思いやりの心」を育むプログラムである。事前アンケートでは、「散歩をしない・あまりしない」割合が 39%と最も多く、散歩をする層も「週に1～2回程度」「往復で 10～20 分以内」と回答した割合が最も多かった。こうした実態から、仲間と一緒に歩くことを仲間づくりの中心に据えて企画したいと考えた。当日までに担当者で3回下見・散歩を実施し、ルートの選定や危険箇所の洗い出しに努めた。当日は、交通ルールを集団で守り、上級生が下級生、年長児を気遣いながら、海岸まで往復して歩くことができた。特に歩道側を年長児にして手をつないだり、まとまって横断できるよう隊列を整えたり、声をかけたりする姿は目を見張るものがあった。年長児は、こうした小学生の姿に勇気づけられながら元気に歩いていた。

【仲間と歩こう！のとウォーク】

⑤なかまと協力！砂像づくり

「協同性」「思いやりの心」を育むプログラムである。異年齢の集団で関わり合いながら活動する力を高めるためのプログラムである。いくつかのキャラクターの中から砂像で表したいものを話し合って決め、制作した。砂を固める、水を運ぶ、穴を掘るなど、役割を分担したり、共に作ったりして、協力して作業できた。互いに考えを伝え合い、一つのものを完成させた時の満面の笑みから、充実感・達成感を味わうことができたようだ。

【仲間と協力！砂像づくり】

⑥イブニングタイム・フレッシュタイム

「自立心」「協同性」を育むプログラムである。団体間交流を目的とした「イブニングタイム」（夕べのつどい）、生活リズムを整えることを目的とした「フレッシュタイム」に、団体として参加した。イブニングタイムでは団体紹介を、フレッシュタイムでは司会係と旗係、団体紹介を子ども達が行った。「やってみたい！」という子どもの主体性を大切にするため、立候補制とした。立候補した子は勿論、それ以外の子も話を最後まで話を聞いたり、拍手したりするなど、自分にできることを見つけて実行していた。

【進んで！フレッシュタイム】

⑦基本的な生活態度（ベッドメイキング・入浴・食事・歯磨き・掃除・片付け）

「自分のことは自分でする」を合言葉に、「自立心」「思いやりの心」を育むプログラムである。ベッドメイキングでは、宿泊経験のある年長児～2年生がベッドメイキングの実演と解説をし、それを手本に、自分のシーツを敷き、枕カバーを被せた。1人では難しい時は、同室の仲間に頼り、助けてもらいながら準備することができた。食堂で4回食事を摂ったが、回数を重ねるたびに、食事マナーが向上した。特に食べ残し、食べこぼしが激減した。また、おかず、ごはん、みそ汁など自分の食事は自分で配膳し、食品ロスにならないよう、分量を考えて盛り付けることができた。入浴では、着替えを準備したり、自分で体と頭を洗ったりした。就寝前の歯磨きも含めて、普段は保護者に頼ることの多い身の回りのことを、自分の力で整えることができた。

【ベッドメイキング】

【食事の配膳】

【シーツの片付け】

絵本専門士を2名講師に招き、読み聞かせを実施した。就寝前にすることをすべて済ませ、いつでも寝られる状態にして読み聞かせを聞いたことで、気持ちよく入眠することができた。絵本専門士には、あらかじめ当日の子ども達の学びを伝え、3つのねらいに合う「自分のことが自分でできる本」「仲間づくりの良さを感じられる本」「思いやりの心を育む本」、そして「おやすみの本」を選定して読んでいただいた。自分たちの目指す姿とタイアップした本の内容に、真剣に話に聞き入り、絵本の世界に浸っていた。

【絵本の読み聞かせ】

⑨ハロウィンパーティー大作戦 Part1

「協同性」「思いやりの心」を育むプログラムである。道具を安全に使って自分の想像したものを作る活動である。Part1では、班で協力して落ち葉やススキ、どんぐりなどを採集し、それらをテープなどで張り付け、世界に一つだけのオリジナル衣装に仕上げた。採集したものをお裾分けしたり、班の仲間の制作をまねしたりして制作を進めることができた。

【秋の自然採集】　　【ハロウィン衣装づくり】

⑩ハロウィンパーティー大作戦 Part2

「自主性」「協同性」「思いやりの心」を育むプログラムである。迎えに来る家族のために、カートンドックを作った。「お母さんはサラダが好きだから大盛りにしよう」など家族のことを想いながら作る姿は、1回目のクレープ作りよりも多く見受けられた。手洗いや消毒、火の使い方など衛生面・安全面にも気を付けながら作業した。また、ハロウィンパーティーの司会は「やってみたい!」という子どもの主体性を大切にするため、立候補制とした。立候補した子は司会進行の練習を班の仲間に観てもらうことで、自信を深めていた。

【カートンドック作り①】　　【カートンドック作り②】　　【司会進行】

⑪成功させよう!仲間といっしょにハロウィンパーティー

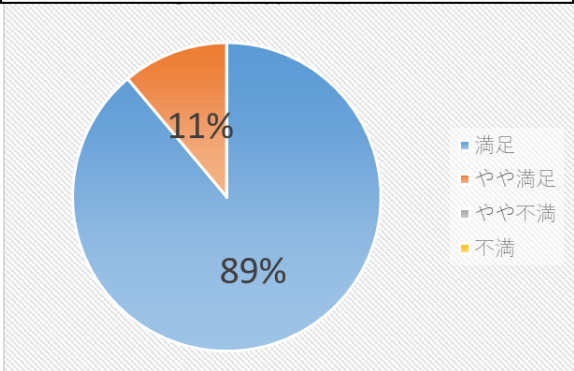
パーティーでは、短い言葉を1人1人がつなぎなから、子ども達が自らの手で会を進めることができた。準備したハロウィン衣装を身にまとい、家族に手作りのカートンドックを振る舞った。食事中は、どんな気持ちで作ったかを話したり、自分ががんばったこと、できるようになったことを伝えたりするなど一泊二日の出来事を話した。「堂々と手をひく姿にびっくりした」「話から充実ぶりがうかがえた」など、集団生活を通しての我が子の成長を実感する保護者が多かった。

（2）アンケート結果について

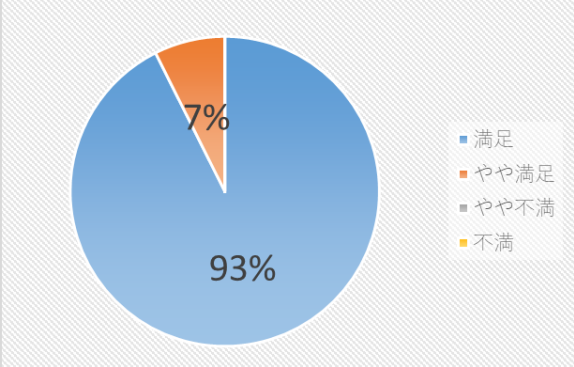
①保護者

事業評価を目的とし、保護者を対象に、4段階での満足度アンケートを実施した。

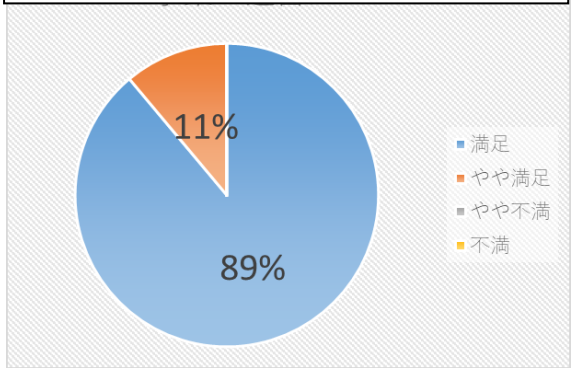
① 本事業全体の総合的満足度



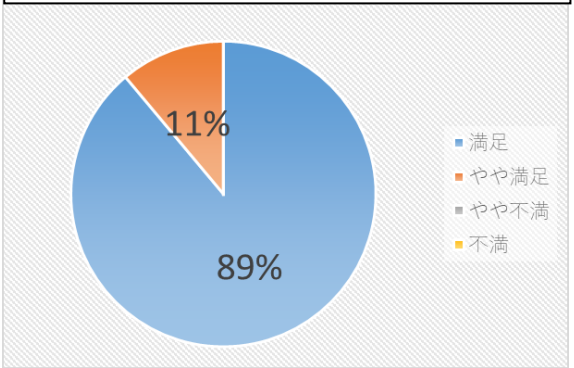
②プログラムの内容について



③事業の運営について



④指導者の助言について



上記の結果から、①は昨年度比3%上昇した。②③④については昨年度と同程度であった。以下に、子育てのとトークに関する保護者の声をいくつか紹介する。

同じ年代の親御さん達と思いを共有できてよかった。
同じような悩みがあって安心した

自分の中だけにとどめていた事を、他の方に話した事で、すこし気が楽になりました。
すっきりしました。

小1児や小2児を持つ保護者の方に
直接「小1のかべ」についてお話を少し聞けてよかったです。

左記にあるように、日帰り後に、保護者にとったアンケートの自由記述には、子育てのとトークで得た保護者同士のつながりや不安や悩みを共有できたことへの喜びや安堵が多く寄せられた。このことから、今後『小1の壁』に直面する保護者、まさに直面している保護者、それぞれの経験や立場で語り合うという意義は大きい。

宿泊後の保護者アンケートの自由記述から、一部を抜粋して紹介する。

・初めは子どもの成長のためにと思い、応募したが、親にとっても必要な時間だったと感じる。
・まだまだ、毎日手がかかると思って子育てしていたが、これからはもっと子ども達の力を信じて、見守っていこうと思う。
・一泊して会った子どもの顔が生き生きしていて成長を感じた。
・家ではできないことを、初めて会った友達と、親から離れて経験でき、本人の自信につながった。
・子ども達が主体で決めていくプログラムはとても良かった。

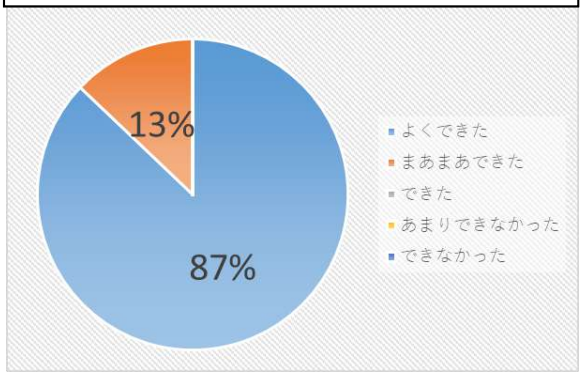
②参加者

事業評価を目的とし、参加者を対象に、5段階で満足度アンケートを実施した。書くことに習熟の差が認められるため、事業を通して確認してきた以下の3つのめあてについて聞き取りを行い、最も当てはまるものに〇をつけてもらった。

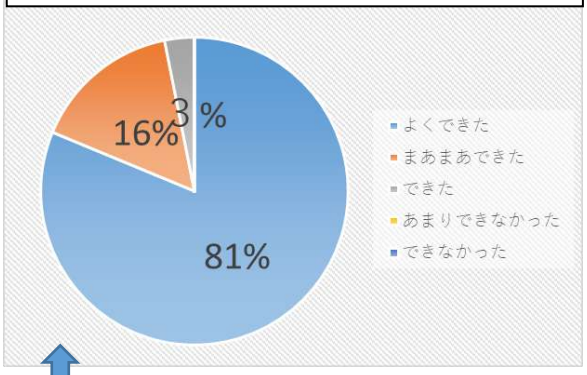
「自立心」　（＝自分のことは自分ですること）
「協同性」　（＝仲間と一緒にチャレンジすること）
「思いやりの心」（＝相手を大事にすること）

また、「どうしてそう思うの？」と理由を問い、必要に応じてスタッフが代筆してワークシート（※）に書き残した。結果を以下に示す。

自分のことは自分でする（自立心）

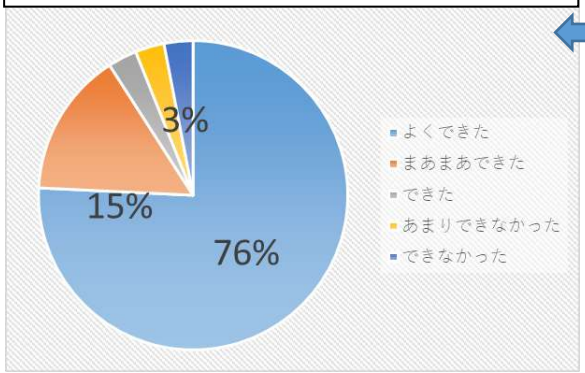


仲間と一緒にチャレンジ（協同性）



※満足度アンケート（ワークシート）

相手を大事にする心（思いやりの心）



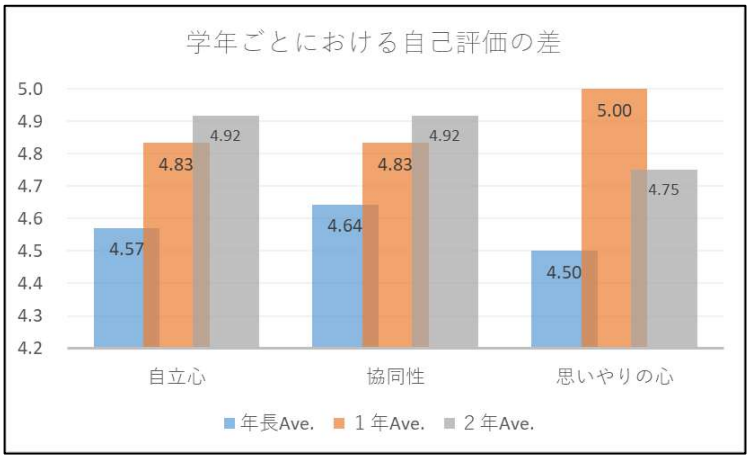
いずれの項目も、30 名が「よくできた・できた」と積極的肯定または肯定的回答をしている。理由を問う自由記述では「散歩」「砂像」「カートンドッグ」といった活動や「仲間と」「協力して」という相手意識、「〇〇（友達や保護者）のために」という目的意識のある記述が多かった。このことから、事業で身につけてほしい態度を、主担当の職員がはじまりの会で伝えるだけでなく、スタッフ全員が、事業を通して3つのねらいを常に意識したアプローチをしたことが、子どもにも伝わったと考えられる。一方で、「3～1」と回答した2名は、いずれも本事業でより支援を要した子で、日頃の基本的生活習慣に課題が多いためではないかと考えられる。

昨年度から継続して本事業に参加した子どもは8名である。当施設のように、年度ごとに主担当の職員が替わると、本事業がどれほど子どもに浸透しているのか、そして事業後に行動や意識の変容があるのか、追跡調査することは容易ではない。そこで、事業への参加が子どもにどれほどの影響を及ぼしているのか、次ページに示す関数を使って分析することにした。

③事業への参加が子どもの自己肯定感（自分に対する自信）に及ぼす影響について

参加者の回答から、AVERAGEIF 関数を使って、特定の条件（事業参加の有無、学年、回答）に一致する数値の平均を算出し、比較してみた。すると、次のようなことが明らかになった。

左のデータから、本事業に参加経験のある子どもの方が、参加経験のない子どもより、「自立心」「協同性」「思いやりの心」ともに数値が高い傾向が見られた。本事業へ参加することで、自分に対する自信を深めていることが分かる。本事業が果たす役割を再確認するとともに、今年度初めて参加した子どもには、次年度以降への参加につなげたい。



左のデータから、学年が上がるにつれ、「自立心」「協同性」の数値が高い傾向が見られた。仲間づくりを通して育みたい各学年の具体的な姿を明確にした支援が子どもの自己成長の自覚につながったといえる。一方、「思いやりの心」では、2年生の数値が1年生と比較して低いが、低く回答した子はいずれも積極的な関わりが多く、責任感の強さが低い回答につながった可能性がある。

（3）成果と課題

①成果

・職員、ボランティアスタッフ（以下スタッフ）による事前の打合せで、本事業を通して育みたい3つの柱を、意識レベルではなく、具体的な行動レベルまで落とし込んで、共通理解を図ることができた。ふり返り時やミーティングでも3つの柱を再度確認し、特に保護者に、子どもの良さやがんばりを具体的に伝えることで、保護者の事業への信頼を得ることができた。

・保護者同士の「つながり」と「共有」を、保護者向けの柱に据えた。特に、日頃から悩みや不安を吐露したり事業に参加したりする機会の少ない保護者にとっては、専門家の知見を得て、保護者同士で語り合えたことで、子どもとの関わり方を見つめ直すよい機会となったようだ。

・子どもと保護者が対面する場面に、子どもの3つの柱と保護者の2つの柱が連動するように、職員、スタッフの役割を明確にしたプログラムを構築できたことも良かった。

・プログラムに時間的ゆとりを持たせたことで、班での作戦会議や準備に充てることができた。

・保護者と離れての生活に精神的ストレスを感じていた子もいたが、同じ班の仲間が温かな声をかけ、励まし合うことで、気持ちを立て直し、前向きに活動に取り組むことができた。

・「とても楽しかった」「ずっと泊まりたい」など、肯定的な回答が数多くあった。

②課題

・野外での活動がメインであったため、トイレに想定以上の時間が掛かった。発達段階を考慮して、トイレの場と時間を確保しながら、活動の展開を工夫していく必要がある。

・見られた良い関わりを、全体で共有する時間がもっとあって良い。（班から、スタッフから）

・意図的な作戦会議のさらなる充実と、自主的な作戦会議の時間を確保する。

「自然体験活動指導者（NEAL リーダー）養成講習」

1　趣旨

全国体験活動指導者認定委員会が制定した「自然体験活動指導者養成カリキュラム」に則り、子供の発達段階に応じた安全な活動を指導できる人材を養成する。

2 日程

（1）期　　日　令和5年１１月３日（金・祝）～5日（日）　2泊3日
（2）参 加 者　14名（内１泊２日の部分履修者４名）
（3）研修内容

11 月3日（金・祝）		11 月4日（土）		11 月5日（日）	
		6:00	起床・準備	6:00	起床・清掃
		7:00	フレッシュタイム	7:00	フレッシュタイム
12:50	受付	7:20	朝食（食堂）	7:20	朝食（食堂）
13:15	開講式	9:00	講義・実習	8:40	宿舎点検
13:30	ガイダンス前半		「自然体験活動の特質」	9:00	講義・実習
14:15	実習	12:15	昼食（食堂）		「自然体験活動の安全管理」
	「自然体験活動の技術」	13:30	講義	12:00	昼食（食堂）
16:30	講義「対象者理解」		「青少年教育における体験活動」	12:45	ガイダンス後半
18:15	夕食（食堂）		※ボランティア養成講	13:15	認定試験
19:30	講義・実習		習履修者は、ガイダン	13:50	閉講式
	「自然体験活動の指導」		ス・認定試験後解散	14:00	解散
21:15	入浴	15:15	講義・実習		
22:30	就寝		「自然体験活動の技術」（野外炊事）		
		19:45	交流タイム		
		20:45	入浴		
		22:30	就寝		

3 成果と課題

（1）活動プログラムの実際

①各講義では、グループワークの時間を多く設け、講師からの一方的なものではなく参加者が主体的となって学べるよう実施した。自然物を使った遊びや、参加者同士で話し合い、メニューや作り方を決めた野外炊事は、参加者の満足度が高かった。

②自然体験活動の指導では、「指導の〇カ条」を考える活動をグループワークで行った。様々な意見を参考にして、自分なりの指導者像を描いていけるようにした。

③参加者同士の意見交換等を活発にするため、各講義・実習ごとにグループを設けた。

（2）アンケート結果について

①教育事業アンケートの満足度（全て満足という評価）は、すべての項目において 100%であった。4段階評価の中で、「10」と付けてくれた嬉しい評価もあった。

②アンケートの記述からは、「様々な活動をしていく中で多くのことを学び、自然に対する知識や自身の意識を変化させることができた」「自然を味わい楽しむことができた」「指導者として、指導内容の準備や伝え方、導入から終結までの流れ等、とても学ぶことができました」等の意見があった。

（3）成果と課題

①成果

・今年度の広報は、施設ホームページ等の SNS、国立及び県立青少年教育施設、県内大学、法人ボランティア等に幅広く周知した。その結果、全国各地（東京、埼玉、長野、兵庫、富山）から自然体験活動に興味のある参加者が集まった。

・野外炊事の活動では、メニューを決めず、食材と調味料を用意した。その結果、参加者同士が意見を出し合い、メニューから制作工程、役割分担を決めて活動を実施することができた。

・安全管理の活動では、基本的なリスクマネジメントの考え方や応急処置等の講義した後、屋外にてシミュレーションをしながら学べるように工夫した。

②課題

・14 名の参加者で活動したことは、一人一人の意見等も時間をかけて聞くことができてよかったが、参加者を増やして実施することを考えると、広報先を思案していく必要がある。市内の教育関係機関と連携し、保育士や小学校教諭の参画を進めていくことも効果があると考える。

・参加者に話を伺うと、防災教育や防災に関連した内容を学べる機会があるといいという意見があったため、次年度以降、プログラムを構成する際に検討する余地がある。

4　事業の様子

【対象者理解】

【自然体験活動の技術】

【自然体験活動の特質】

【自然体験活動の指導】

【青少年教育における体験活動】

【自然体験活動の安全管理】

令和５年度 国立能登青少年交流の家 職員

所長	北見 靖直
次長兼総務・管理係長	濱名 和久
主任企画指導専門職	田中 久年
企画指導専門職	恩田 雅博
	酒井 伸大
主幹兼事業推進係長 兼企画指導専門職	小泉 滋
事業推進係	橋　知佳
	横山 太樹
	松田 祥平
	郷原 直也
	吉田 梨帆
	福田 靖
	齊藤 吉夫
総務・管理係	松村 晃
	木下 沙耶香
	寺井 文孝
	荒水 久夫
	石黒 佳恵

令和５年度 国立能登青少年交流の家事業報告書　*Do my best!*

■発　行　日　令和６年３月

■編集・発行者　独立行政法人　国立青少年教育振興機構 国立能登青少年交流の家

〒925-8530 石川県羽咋市柴垣町 14-5-6

TEL 0767-22-3121（代）　FAX 0767-22-3125

国立能登青少年交流の家

〒925-8530
石川県羽咋市柴垣町14-5-6

TEL ：0767-22-3121
FAX：0767-22-3125
Mail ：noto@niye.go.jp
ＨＰ ：https://noto.niye.go.jp/